



## 巻頭言

会長 徳光 正子



2004年もあと一ヶ月を切ってしまった。景気はいささか回復しているとは言え、中高年の自殺者は過去最高だと言う。物質的に恵まれ豊かな日本の社会の中で、戦争で命を失う人よりも何倍もの命が失われている現実。不治の病いや障害と闘いながら懸命に生きている方々もあるのに、メール仲間と簡単に死を選んでしまう人達もいる。悲しい痛ましいニュースも多かった。現在の世界は高度に発展した文明社会で、物質的には何不自由なく生活している人々は多くいるけれど、人の心は傷つき病んでいる。社会は、偽証、汚職、スキャンダルがはびこり混沌として、人の心は疲れきっている。世間ではスローライフと叫ばれながら溢れる情報に囲まれ忙しく日々を過ごしている。私自身、これではいけないと思いつつ心貧しい者の一人である。

最近、素敵な結婚式があった。花嫁は13才年上。離婚歴あり息子が二人。子供は産めない上に、足が不自由。新郎

は初婚。始めから条件の悪い結婚だった。美しい秋晴れの中、神の前に愛を誓った二人に多くの人達が涙を流した。新郎の真面目で誠実で、「子供はできなくても家族が与えられた」と受け入れる優しさに。彼女の今までの人生の苦難を知るが故の喜びに。そして二人の息子達が、この結婚を心から喜び、苦勞をかけて育ててくれた母親に幸せになってほしいと泣きながら贈ってくれた暖かい手紙に。皆が感動を覚えた結婚式だった。結婚は社会の最小のユニット。夫婦が信頼を寄せ許し認め合えば、あたたかいぬくもりと愛のある家庭が誕生し、たとえ貧しくても家族に平和が訪れる。もうすぐクリスマス。クリスマスは悪と争いに満ちた世界への愛のメッセージだ。

全世界に平和が来ますようにと心から祈ります。メリークリスマス。そして2005年は良い年でありますように





第57回国際ゾンタ世界大会

2004年7月4日(日)～8日(木) 於ニューヨーク市

ニューヨーク報告

宮本 典子



第57回国際ゾンタ世界大会はニューヨーク市で2004年7月4日から8日迄行われました。3日には26地区地区会議、電子投票の練習、国連のワークショップ、大賀エリアディレクターのボードミーティング、がありました。

7月4日10時から開会式で8日夜の閉会晩餐会迄一杯のスケジュールでした。事務的なことは他でも報告がありますし、一寸感想を書かせて頂きます。

電子投票

今回のコンベンションでは、はじめて電子投票が使われました。これはテレビのリモコンのような機械に各自の持つ票数があらかじめ組み込まれており、会場を飛んでいる電波が各リモコンのボタンを読んでゆくと云う仕掛けで1分ほどの間に1200もの会場の票を読み取ります。結果はすぐに会場の2つの大きなボードに掲示されます。自分の票が確実に読まれている証拠を欲しいと云うのでデリケート数を何度も数えなおし、前日1時間半もかけた練習のあと係は徹夜で票数を調べ、翌朝8時から再び練習をしましたが票数がどうしても6票ほど違う。もう止めようかという時に動議がでて7票(9票だったかも知れない)以下の差の時は紙投票にしようということで全員同意し会議が始まりました。自分のリモコンが読まれているか全員が確認しつつ討議が進められました。それにしても1200余りの票を把握するのに絶対間違いのない言い切って模擬投票に入ったり、どうしてもあわないと今度は止めようかとなったり、その正直さはお国柄かなと面白く思いました。

ゾンタ会員について

会員増強は各クラブとも切実な問題で、classified会員

になるについて、現在求職中の若い人とか仕事をやめた人でもよいのではないかという案ができましたが否決、やはり現役で仕事に関わっている必要があるということになりました。クラブ役員には、現役で従事していなくてもclassifiedの会員であればよいということで可決されました。

この議論の中から世界的に、女性の仕事につくことの難しさ、仕事についている人の忙しさがあること、そして会員を増やしたいけれども、仕事をしている女性でなければならないという点は譲れない、専門性を持つメンバーの集まりがゾンタであり、ゾンシャンであることを皆が誇りとしていることをつよく感じました。そしてゾンタは女性の地位向上を使命とし、単なる地域の社交クラブではないとあらためて思ったことでした。

同時通訳

今回も会議には日本語通訳がつかしました。ゾンタは英語が公用語であるから英語が出来なくてはダメだとかいろいろ日本ではいわれていますが、同時通訳は細かいことも楽に聞けてとてもよいしぜひ必要と思います。それに今回の通訳の方は大変行き届いてよい方だったと思いました。国際会議でもヨーロッパの方が多くなり、アジアやアフリカも多くなって英語だけではわからない、フランス語や他の言葉も通訳をお願いするという意見が出ていました。皆同じ悩みをかかえているのです。そのなかで笑顔で充分交流できると思います。次のコンベンションではぜひ皆で楽しみたいと願っています。

ニューヨークの国際大会に参加して

丸山 優子



診察の代診がなかなか見つからない為、7月3日から7日までと本当に短い参加になりました。今回はボストンに留学中の三男夫婦と合流し、共に楽しみたく、アメリカの独立記念日に催される花火大会に参加しました。飛行場からマンハッタンまで移動していた自動車の中で、911テロ以来ニューヨークでは花火は禁止され7月4日久しぶりに打ち上げられると聞きました。当日は会場に各国のゾンシャンがお国自慢の服装で集まり非常に華やかで、初めて参加した息子夫婦はゾンシャンのパワーに圧倒されていました。いい経験になったと思います。順番に貸切バスでハドソン川に浮かぶ大きな船に乗り込み、バイキングの楽しいディナーが始まりました。

ニューヨークの花火はイーストリバーと自由の女神の立

つりパティーアイランド付近の計5ヶ所で打ち上げられました。自由の女神を背景に幾重にも途切れることなく広がる光の輪を見ますと、ただただ「すごい」の一言。又ビルの間から大きな音と共に打ちあがる光の華は日本では見られない感激の光景でした。ふと気がつくと周りの人々からアメリカの国歌が自然発生的に広がりました。人々の心の中には自然にアメリカの国歌が流れるのには驚きを感じ、私は果たして日本でこのような光景が起こるだろうかと考えさせられました。最近、私は少しのことでは素直に感動し感激することが少なくなっていることを感じていました。今回世界大会に参加し沢山のゾンシャンから若々しいエネルギーを頂き、又頑張る力が湧いてきました。短くても本当に参加して良かったと思えました。



ゾンタ・インターナショナル・コンベンション2004に参加して ..... 河村 さと子



今回のニューヨーク・コンベンションの前半のプログラムに参加した。前々回のハワイ大会に比べて大会の規模、盛り上り、華やかさには欠けるものの、会全体としては落ち着きがあり、地味な中にも実質的な運営がなされていたのではないと思う。特にオープニング・セレモニーでの基調講演はフィリピン女性によってなされたが、その落ち着きのある態度、明確で美しい英語、話の具体性、説得性に私は深く感銘を受けた。



今回、アジア各国やアフリカ各国のゾンシャンの元気が目立っており、今世紀は有色人種の時代であると痛感した。

私共、大阪Ⅱからの参加者はもとより、大阪Ⅰより、徳光清子様をはじめ、御年配の方々も多く参加しておられ、高齢者の方々の元気さにも嬉しい気持ちで一杯になった。

今回のコンベンションでのハイライトであるアメリカ独立記念日ディナー・クルーズにも参加したが、セイリング、花火、食事、上甲板での交流等、今一つ盛り上りに欠け、正直に言えば、少しうら淋しいものがあった。

これは私の期待過剰にも原因したかも知れない。各国のゾンシャンたちと一緒に楽しんだブロードウェイ・ミュージカル「シカゴ」は今でも時々思い出す程に印象深いものであり、意外にもディナー・クルーズよりも全ゾンシャンにとって良いコミュニケーションが実現できたのではないと思う。

その他、ワーク・ショップの持ち方や、オフィスの運営の不手際や、会場のマリOTT・マーキーズ・ホテルの古めかしさ、不便さ等、イライラさせられることも多かったが、大勢の人間を捌く為の方法や気配りのポイント等について考える機会にもなり、何かと勉強になった。ともあれ楽しいニューヨークのひとつときであった。

内藤 恵子



ニューヨークで開催されたZONTA57回国際大会に、7月3日から1週間行って来ました。丸山優子先生、河村さと子先生と3人、リーガロイヤルで落ち合いました。会場のマリOTTホテルまで早速でかけ、開会式に参加しました。独立記念日の花火も、船から見せて貰い、丸山先生は一足先に帰国されました。さと子さんと2人でミュージカルシカゴをみましたが、1番前の真ん中の席を取ってあり、さすがZONTACLUBと感心しました。演者にすぐ手が届く距離で歌も踊りも迫力満点でした。日本のZONTIANは見かけませんでしたが、他の国のZONTIANがたくさん見て盛り上がっていました。次の日さと子さんも帰国され、1人になってしまいました。でもさと子さんと、あっちこっち歩いたので1人でも土地勘ができていたので安心でした。1人になって、メトロポリタン美術館に行き、Japanese Tourに参加できました。日本語で解説して1時間で1周りしてくれます。終わってから1人で好きな絵を鑑賞しました。レンブラントは屋根の修理でしまっていて見られません。帰りはウインドウショッピングをしながら歩いて、ホテルまで帰りました。翌日は最後の閉会式です。それぞれのお国衣装を着るそうなので、私は沖縄の紅型でつくったワンピースを着ました。会場のマリOTTホテルはメッツの松井が入団会見をしたところで、タイムズスクエアー

にあります。2000人近くのZONTIANが入るので、エレベーターに乗るのも一苦労でした。テーブルはきれいにセッティングしてあり、キャンドルの灯りでした。銀の紙を切り抜いてつくった音符がシャンパングラスの周りにまき散らしてあり、雰囲気盛り上げていました。私のテーブルはCanada-Ontarioから5人、Africa-MOZAMBIQUEから1人、USA-Arizonaから1人の8人でした。OntarioのZontianのご主人は35年前横浜に住んでおられ、私に会って日本を思い出してきたと、日本語の単語を話したり、童謡をうろ覚えながら歌ってくださいました。“もしもし亀よ”でした。きんきんきらきらも少し歌えました。もしもし亀よはローマ字で書いてあげました。いろいろ話しが弾み、楽しかったのですがMozambiqueの人はあまり英語を話さないのか打ち解けませんでした。すごくきれいな地模様様の綿の生地をたっぷり使った民族衣装で、ほめたのですが話が繋がりませんでした。最後のミュージカルショウが席から見えないので、ArizonaのZontianに誘われて2階の席に移動しました。真正面から舞台をみてミュージカルナンバーを楽しみました。世界中のZontianが一同に会して壮観な場面に参加でき良い思い出になりました。ZONTIAN同志でパッチを交換するので次に行かれる方は是非持って行ってください。



吉田優子さんを迎えて

牛田 三千子



「女の園」で知られた宝塚歌劇団ですが、制作、脚本、演出、作曲、振付、装置、照明などの舞台裏の仕事はすべて男性による「男の園」だったようです。そのことを知ったのは、「タカラヅカに初の女性座付作曲家誕生」という新聞記事を徳光会長が読まれ、それを私たちに見せて下さったことからでした。この方吉田優子さんをお招きして、男性スタッフの中で仕事をされるご苦労、また大勢の女性劇団員をたばねていく難しさをお聞きするのは、「女性の地位向上」を目標のひとつに掲げるゾンタのイベントにふさわしいのではないかということになりました。

早速、笠置会員に連絡をとっていただき、徳光会長はじめ数名がお会いしてゾンタの趣旨を説明したところ快諾をえました。インタビュアーには、以前卓話にお越し下さった映画評論家三木真理子さんをお願いし10月2日の当日を待つはこびとなりました。

10月2日(土)は生憎小雨模様のお天気でしたが、約130人のお客様をお迎えし、1時から花外楼さんの「秋のお弁当」でランチタイム。13卓のテーブル並べもクロス掛けも経費節減のためすべて自力で行いましたが、クロスの掛け方など親切に教えていただき勉強になりました。

昼食の間は、吉田優子さん作曲の主題歌をメドレーにしてBGMにしたり、主題歌を歌う場面の舞台ビデオを見たりして会場のタカラヅカムードが盛り上がったところで吉田優子さん、三木真理子さんが登場。三木さんのスムーズなトークと進行で吉田優子さんの宝塚でのお仕事の内容、進め方がよくわかります。まず詞があって、それに曲をつけ

ること、主題歌だけでなくひとつの舞台だけで30曲ほど必要なこと、男役の音域に合わせて曲をつくることなど興味深くお話をうかがいました。

あの華麗な舞台を盛り上げる大きな要素である主題歌。こころに残る美しい曲を作曲されるには大きな才能とこつこつとした小さな努力の積み重ねが必要なのだと納得し、これは宝塚だけでなく全ての分野においても同じことだと感じました。

そのあと、元タピアニストでいらっしゃる吉田優子さんに、ご自分の主題歌のなかから「愛燃える」と「薔薇の封印」の2曲を演奏していただきました。その激しく情熱的な曲を聴きながら、目の前に舞台の場面が浮かび上がってうっとり酔いしれたひとときでした。

最後は、川村さと子会員の歌唱指導のもと参加者全員で「すみれの花咲く頃」を斉唱して散会となりました。

季節は秋ながら、中央公会堂はすみれ色一色に染まった春のような幸せな一日でした。



北九州やきもの紀行

萩原 謠子



11月3日、4日と秋の爽やかな空気の下、田中茂美会員企画の旅が行われました。牛田会員、丸山会員(日帰り)、宮本会員、私の5人が参加しました。

伊丹空港を8時35分出発、約1時間の空の旅で福岡空港に到着。迎えに来ていたジャンボタクシーに乗り込み昼食予定の伊万里ステーキハウス「らいおん」に向かいました。熊本から出てきた運転手さんは土地勘があまりないらしく、お店と電話で位置の確認をしたのですが、お店の人の説明も要領を得ず、行ったり来たりしてしまいました。やっとたどりついた「らいおん」は周囲の風景とは似つかわしくないモダンなお店で、佐賀牛のとろけるようなおいしさもさることながら、使われている陶磁器の食器も味わい深く目を楽ませてくれました。

腹ごしらえも済み、いよいよ伊万里秘窯の里、大川内山へ。

ここは三方を山に囲まれ、山水画のように切り立った大屏風奇岩の麓で、鍋島藩が中国景德鎮の官窯を模して御用窯をおいた処です。300有余年の歴史ある煉瓦作りの煙突や窯元が30数軒立ち並んでいました。店先の焼き物はそれぞれに個性があり、見る者を楽しませてくれました。光山窯で気に入ったお皿を見つけお土産に買いました。一服した喫茶店のコーヒーカップもトレイも伊万里焼でとてもおしゃれでした。流れる川に渡された橋の欄干は陶器で出来ており、土手にもお皿が埋め込まれ、お店の洗面所のボールもやきもの、さすが陶器の町です。

その日は武雄温泉 湯元荘 東洋館に宿を取りました。落ち着いた風情のある宿は、しばし時の流れを忘れさせてくれました。地の物、時季の物が美しく盛り込まれたお料理をゆっくり味わいました。アルカリ性単純温泉もしつと



りと日常の疲れを癒してくれました。

2日目はまず九州陶磁文化館を拝観しました。九州陶磁の歴史や特色がわかるコーナー、肥前の古唐津陶器や初期伊万里をはじめ鍋島藩窯の磁気なども見ることが出来、今まで陶器と磁器の違いも詳しくは知らなかったのですが、しっかり勉強することが出来ました。本物をゆっくり見ることが出来て生地のきめ細かさや、色つや、彩色の具合などの味わいが少しは分かったような気がしました。

そして、次は柿右衛門窯を訪ねました。邸の前に立つトレードマークの柿の木を背景に記念撮影をしました。その熟した実に赤色のヒントを得たと言われます。

有田焼卸団地では、25の店舗が軒を連ねそれぞれ特色ある陶磁器を並べており、見ているといろいろ欲しくなってきました。

赤絵町トンバイ塀も趣のある処でした。トンバイとは登り窯を築くのに使った煉瓦のことで、高温で焼かれ表面がガラス質に変化し微妙な色合いになったものや、使い捨ての窯道具を赤土で固めトンバイ塀にしたとのこと。そ

こを散策し深川製磁や香蘭社に足を止めました。香蘭社では2階の喫茶室から絵付けの様子がみられるようになっていました。

17時50分発の飛行機搭乗なので時間のかかる吉野ヶ里は諦めて、太宰府へ大急ぎでお参りました。運転手さんの時間感覚が悠長というかアバウトで、ハラハラする場面もありました。エスカレーターを駆け上がるような大阪に住む私たちの感覚と雄大な阿蘇の麓に生活する人との時間感覚のズレかしら・・・などと思いつつも、いつも時間に追われてゆったりすることの少ない自分の生活をちょっと反省してみたりもしました。

今回の1泊2日の旅では、道中のメンバー同士のおしゃべりも和気藹々と楽しかったですし、「焼き物」にもお料理にも堪能しました。自宅に着いてから届いた陶器のお土産もいつまでも大切にしたい物です。

「北九州やきもの紀行」は心に潤いを与えてくれましたし、思い出に残る楽しい旅となりました。







### 第一回国際メンデルスゾーン・ガラコンサート

2004年12月6日第一回国際メンデルスゾーン・ガラコンサートがパリのテアトル・ド・シャンゼリゼで開催されました。丁度パリはエッフェル塔も美しくイルミネートされ、クリスマスの飾りつけでとてもエレガントで豪華、より一層お洒落な街に見える、そんな時期でした。コンサートの主催は国際メンデルスゾーン基金、その会長は世界的指揮者、現在はパリ国立管弦楽団の指揮者のクルト・マズア氏です。フランスのシラク首相やドイツのシュレーダー首相の強力な後援を得て、ポンピドー元フランス大統領夫人を名誉会長として、イギリス、フランス、ペルーの各大使、メンデルスゾーンハウスのあるライブチッヒの市長、地元のパリの財界人や大学教授といった方々が理事を務めておられ、この日のコンサートに列席されました。

今回、夫の母(辻恵美子、満90歳7ヶ月、大阪Iゾントクラブ会員)は、大変光栄なことに、20年来の親しいお付き合いをしている、クルト・マズア氏からお誘いをうけました。メンデルスゾーンは素晴らしい才能を持った立派な音楽家———今から200年近く前、1809年ハンブルグに生まれ、祖父は偉大なドイツの哲学者、父は銀行家という優秀で裕福な家庭で育ち、9歳でピアニストとしてデビュー、15歳までに13の交響曲を作曲。ゲーテが15歳のメンデルスゾーンを激賞したと言われています。17歳の時にシェークスピアの小説に魅せられ、「真夏の夜の夢」を作曲、20歳でバッハのマタイ受難曲を蘇えらせたのはメンデルスゾーンの大きな功績です。楽譜の入手が困難で、マタイ受難曲もバッハが在世の1729年に演奏されて以来、丁度100年目にバッハ没後初めてベルリンでメンデルスゾーンにより演奏され、バッハルネッサンスを引き起こしたと言われています。38歳で世を去るまで「イタリア」「スコットランド」など17曲の交響曲を作曲、ドイツ最初の音楽院として現在のメンデルスゾーン音楽、演劇大学を創設し、ライブチッヒをドイツ第一の音楽都市としました

———この立派なメンデルスゾーンが名曲を沢山残しているのに、彼がユダヤ人であったが為、それらを演奏されることが無く(ナチスドイツ時代には作品の演奏が禁止されました。しかしヴァイオリン協奏曲だけはメンデルスゾーンの名前を伏せて演奏されていたそうです)才能が埋もれたままになっているのです。彼の立派な銅像も一夜で壊されました。それはあまりに勿体ない、それらを発掘し、世界の出来るだけ多くの人達に知らしめよう、という運動を、マエストロ・クルト・マズア氏が先頭にたって展開しはじめていらっしゃる、その記念すべき第一回のガラコンサートなのです。

母はメンデルスゾーンの曾孫スージー(スザンナ・ハイグル・バッハ)と40年以上もの親交があり(私も1996年にスージーをスイスのロカルノに訪ねました)メンデルスゾーン家の立派な家系をよく知っていました。メンデルスゾーンが住んでいたライブチッヒの家が、あるホテル業者の手に渡りそうになっていることをマズア氏が知り、取り戻し、記念館を作ろうとしておられたことを母が知った時、是非その運動を手伝おうと、母は日本のみならず世界の友人達にも働きかけ大募金運動に立ち上がりました。その活動は数年に渡り、延べ数百人の人に声をかけました。さらにイギリスで出版されているメンデルスゾーンの生涯についての本をスージーから頂いていたので翻訳・自費出版し、その本を基に再度募金をお願いするという程の熱の入れようでした。その結果、可成りの大金をメンデルスゾーン基金に寄付することができたのです。その母の活動を讃えて、マズア氏はこの日の演奏が始まろうとする時、指揮台に乗って聴衆の方にくるっと向き直り、「マダムツジはメンデルスゾーン記念館が出来上がる前から絶大な支援を続けてくださっています」と2階正面ボックス席に座っている母を紹介して下さったのです。期せずしてこのような晴れやかな場で紹介された母は驚きながら満面に笑みをたたえていまし



マズア夫妻と辻家一行



た。私にはピンクのドレスを着た母<sup>が</sup>眩しく、とても誇らしく胸がジーンと熱くなりました。

現在この運動は、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、日本の5カ国で進行中だそうですが、「もっと、もっと」とマズア御夫妻は一生懸命です。若い人を育てて行きたいとの御意向でこの日のコンサートも、パリ国立音楽学院の学生のオーケストラによる演奏でした。2台のピアノのためのコンチェルト、交響曲第4番“イタリア”を若い人達がエネルギーで新鮮に演奏し、聴衆を楽しませてくれました。このコンサートは多くの人の善意に支えられ、出演者、会場もすべて奉仕、そして収益金はメンデルスゾーン基金に寄付されました。

メンデルスゾーンの曾孫スージーは1998年、96歳で亡くなりましたが、生前彼女は母に「これはメンデルスゾーンの妻、セシルのもので親子4代<sup>も</sup>わたり受け継がれてきたけれど、もうメンデルスゾーンの直系家族は自分で終わるから、これはEmikoに渡しておくのが一番良いと思う」と40余年の友情の証とも言える真珠の大きな十字架ペンダントを手渡されていました。母は永年大切にしていたのですが、この度ライプチヒのメンデルスゾーン記念館に寄贈させて頂くことにしました。これにはマズアさん、記念館事務局長のエルンストさんはじめ、会場に居合わせた方々にも大喜びされ、母が本当に良いことをしてくれたと私も嬉しく思っています。

5年後の2009年はメンデルスゾーン生誕200年に当たります。

母と共に再びそのガラコンサートに出席することを目標に、メンデルスゾーンの広報活動に協力していこうと思っています。世界の無形遺産ともいえるメンデルスゾーンの名曲を若手の音楽家達を育てながら世界中に広めて行けるように、この運動に一人でも多くの方の御協力、御支援が得られますように、切にお願いしたいと思います。皆さまどうぞよろしくお願いいたします。



ペンダントを見せておられるエルンスト氏

## 11月の卓話

田中 茂美



### 角山先生による「中世史における世界の中の大坂」

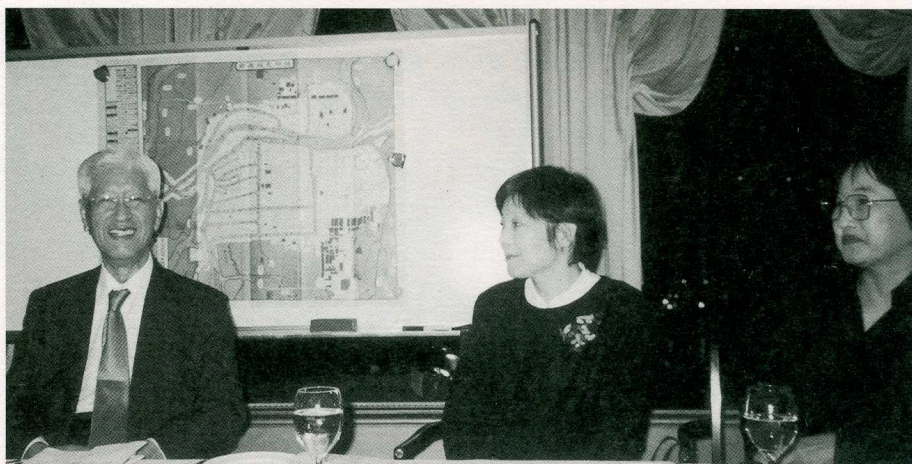
年に何度かの例会卓話、今回は、宮本典子様のご紹介にて、元和歌山大学学長（同経済学部名誉教授）であり現堺市立博物館館長『角山 栄』先生をお招きさせていただき、大阪の経済的な位置付け「世界の中の大坂」についての大変愉しく且つ有意義な実りあるお話を拝聴しましたのでそのご報告をいたします。以下内容。

大阪は、中世では『大坂』と称された。中世の経済都市としては、『堺』の方が古いのだが、隣接している大坂は、近世にいたっても都市としての繁栄を継続したにも拘わらず堺が沈下していったのはなぜか？堺は大坂とどのような関係にあったのか？

最近になり堺が、環濠都市であったことが発掘調査で判明した。堺の市中は内堀に運河がめぐらされ、運河が、交通や運搬の中心を担っており、「ベニスのごとし」といわれたが、発掘調査から

みると、市中に棧橋の跡が見つかっており、どちらかというと、アムステルダムに近い形態の都市であったようだ。堺と言えば、「南蛮貿易」で富を得た豊かな中世都市として知られているのだが、「南蛮船」が停泊できるような港は、記録では存在しない。

「南蛮船」は、おそらく九州に停泊し、瀬戸内海を小船で渡り市中の運河に入って交易をしていたと思われる。堺には、大河がなく、船が通れるような河口はなかった。運河の水は、潮の干満で左右されるものであった。環濠都市として自治都市の形態であったとされるが、実態については、記録がなく不明である。秀吉は、このような堺を欠陥都市と考え、大きな発展は見込まれないと判断し、当時、海に浮かぶ島の集まりの地形の大坂に都市をつくる計画をし、堺市中の運河を埋め立てて堺商人を大坂へ移住させた。





1600年頃の記録によると大坂は、八十島(やそじま)という島のあつまりであり、今尚、島や橋のつく地名が多いのは、その名残りである。大坂は秀吉により、海運の利にめぐまれ、京、他都市への地の利にもめぐまれて、国際都市として発展した。当時、大坂はデルタ湿地帯であり、必然的に大土木工事が行なわれている。河村瑞軒による九条・安治川工事、鴻池による鴻池新田工事、大和川のつけかえ工事、泉尾の干拓工事等が有名である。また、市中に入り込む河川の支流も運河として利用され、整備工事もされた。この当時、日本は金、銀が豊富であり経済大国であったことが窺える。スペインは、南米の銀を手に入れ大国になったが、日本は自国の鉱山で潤沢に金銀にめぐまれていたため、各地で、大土木工事が可能であり、江戸(50年かかった)、箱根用水、諸国の城郭、寺社の建築が、可能であった。香料・生糸・綿・磁器・お茶・砂糖を求めて、ヨーロッパ人がアジアに集まると共に、キリスト教の流入が、日本国内におこり、結果として鎖国政策が行なわれて、国際都市としての大坂の機能は、低下してゆく。が、経済の中心都市としての役割は、近年になるまで果たすこととなる。

ヨーロッパ人の、「キリスト教文明が世界を創った。アジアは野蛮」という発想に基づき、歴史はキリスト教文明を中心にしてつくられてきた。が、最近になりこの歴史観が間違いであったことが判明してきた。

20世紀は、アメリカの世紀だったが、21世紀は、アジアの世紀である。15～16世紀には、アジアは、豊かな資源と文化に基づき世界の中心であった。21世紀は、アジアリネッサンスの時代を迎えるに違いない。英国で1963年に「日本は発展する」といったらブーイングがあったが、70年代には日本が、英・仏・独を経済力で追い抜いた。80年代には、香港・台湾・シンガポールが台頭し、ソ連の崩壊後は中国の台頭が目覚しい。「アンドレアンダ・フランク」USA著が、アジアの歴史と復活を見直せと説いている。ソ連は、アフガニスタンで崩壊した。アメリカは、イラクで崩壊するだろう。キリスト教文明しか知らず、イスラムを知らずしてこの戦いに勝つのは不可能だ。今は、『テロ』を相手に第4次世界大戦の渦中ともいえる。アメリカの世紀は終わりを迎え、20年後には、アメリカ関連株は、大暴落する可能性もありうる。と

時に13億人のマーケットを背景にした中国を中心したアジアが台頭するだろう。この時『日本』はどこへ行くのか?将来の日本へのシフトが出来ていないのが現状である。工業化の時代は終わり、知的生産の時代になった。知的生産には、情報の収集、分析と何より教育が重要である。日本は、幕末から明治にかけて識字率は90%以上であり教育水準は、世界で最高の部に属した。1960年代に中国の識字率は50%だったが、現在は教育改革され進歩し大学生の質は、日本より格段に良い。このままでは、中国に遅れをとることとなるだろう。今の日本は中世以後の『堺』と同じに思える。『堺の富』の特徴は、財は、一代で終わっており、茶の湯や寺に富をつぎ込んだ点である。これに対し、大坂の商人は、息子より娘に優秀な婿を娶り、家業を繁栄に導き、「贅沢はするな!茶の湯はするな!」と家訓を残し将来の発展の為、情報を集め勉強をし、研鑽を積んだ。最近の『大阪』が、斜陽しているのはなぜか?日本の将来を暗示しているようでもある。

一足先に産業革命を興した英国では、『家庭の文化』がすでに崩壊しそれと共に、国の斜陽を迎えて久しい。日本でも最近その傾向が強い。文化も教育も基本は家庭で育まれるものである。「Communication Hospitality Association」(CHAの心)をもって次代を育てていただきたい。

その後、多くの質問や楽しい先生のお話が会食と共に進み、一同大変『元気をいただいた』例会となりました。

角山先生は、スラッとして背が高く、髪も豊かな眉目秀麗の美男子で、おしゃれで、未来への希望と新たなことへの発見や取り組みに対するパワーが、漲っておられ大変魅力的なお方でした。「ダンディー」そのものです。今回の時は、講演会に演者としてお話をいただければと一同思っています。最近、家事もなさると伺いました。毎朝、欠かさず、体操をされ、規則正しい生活に心がけているとのこと。お肌にシミも無くスベスベで10歳以上は、お若く見えます。先生が、何度も『僕84歳なんです。』とおっしゃらなかったら・・・先生のように素敵に年令を重ねて生きたいものだと思います。

## 忘年会

今年の忘年会はフランス料理で。と言う声があつて、私達は「ル・バンサンク」に会場を決めました。

この日は台風が日本に接近していました。叩きつけるように降る雨を「上陸すれば今までに経験したことのない程大きな台風になるだろう」とテレビは伝えておりましたが私達が入る頃には少し小止みになっていました。

徳光会長により議事が進められました。先ず平成17年度のトレーニングセミナーに出席される方。次で他クラブのイベントの出席者を決めました。私達のクラブでも数年のトラブルで会員が減っています。より良いZONTA活動をす

## 川村 くに



るためにはもう少し会員が増えて欲しいと皆が希望していました。誰もが仕事を持っています。仕事とゾンタ活動とうまくこなして、ほこらかに力強くゾンタ活動を続けることを会長も願っておられるようでした。

次いでフランス料理で懇親会が行われました。そこで内藤恵子さんが持ってきて下さったプレゼントの抽籤があり、一段と盛り上りました。

おいしいお料理においしいワイン皆さんいかがでしたでしょうか。

## 編集後記

寒中御伺い申し上げます。皆様の御協力で21号を出す事が出来ました。早くに原稿を頂いた方もありますのに遅れてしまい申し訳有りません。昨年は世界中で色々な事件が起き、特に暮のスマトラ沖地震で被害を受けられた方、日本でも相次ぐ台風と地震で被害を受けられた方、心よりお見舞申し上げます。今年は平安な年でありますよう、心よりお祈り申し上げます。